



釜ヶ崎今昔考

その一 明治以前の釜ヶ崎

徳 智 徳

釜ヶ崎・愛隣地区

この原稿を書くに当り、筆者は愛隣を使用せず、敢て釜ヶ崎を使用する。一体誰が、いつ釜ヶ崎という名称を勝手に変えたのであるうか。

去る昭和四十一年五月二十八日、第五次釜ヶ崎集団暴力事件が発生した。午後九時三〇分、地区内ニコニコ暮会所より出火し、消防車到着が遅いと約千人が投石、消防車を顛覆させた。更に労働者は飛田本通商店街入口の大一パチンコ店に投石、タクシーに放火した。一〇時三〇分、群集は二千人に増え、その内警察官がピストルを強奪され、一ヶ月の重傷を負う事件があった。もちろんマスコミは一斉に釜ヶ崎をトップに扱い報道した。

その後六月十五日、大阪府公安委員会主催の『大阪府・市・府警本部』会議の小委員会として、大阪府労働部、同民生部・大阪市民生局・府警本部防犯部が協議し『あいりん』と正式に改名している。翌十六日には大阪府警本部に『あいりん地区治安対策委員会』が発足し、マスコミを通じて新生愛隣の名をPRした。しかし同日夕刻の愛隣地区には次の貼紙が多数出された。『土地の名は、愛する隣と変れども、腹をみたすにや釜ヶ崎(先)なり』と。これが労働者の真意であろう。

さてこの愛隣という呼称はこれが初めてではない。即ち大正十年六月二十日開館の市立北市民館(志賀支那人館長)の諸事業の中に見られる。同十五年五月二十八日、当時地区内にあった善隣・共愛の各信用組合を合併させ、志賀館長が愛隣信用組合と名付けている。又最近、どのメーカーかは忘れたが、テレビの愛称に確か愛隣というのがあったと思う。以後今日まで公式には、「あいりん」が使用されているが、実質的には釜ヶ崎、通称「カマ」で通じている。この名称に関しても塩釜神社説・四天王寺建立時代説・入江説・銭湯入浴順説・入質説等々が言われているが、此等については別の機会に譲る。

長町・名護町

長町の由来は、市電日本橋(昭和四十四年三月末全廃)一丁目あたりから戎警察署(現

浪速署)の北に架っていた名呉橋に至る両側、一直線の狭長なる町で、その東西に人家は無く、田園ばかりの実に寂しい所でその形が狭く長いので「長町」という。(佐古慶三氏編「大阪町名考」)又別の説として長町一帯は昔、名呉海・名呉浜という相当世間に知られた所に出来た町故、名呉町と称し後名護町と長町となったという。しかし筆者は佐古氏の説で言う狭く、狭長な町なるが故に長町と称したの説に賛成である。

先の日本橋筋一丁目と五丁目迄の町名は寛政四年(一七九二)より呼ばれたもので、以前は何れも長町一丁目と五丁目と呼ばれていた。天明七年(一七八五)の秀鶴随筆にも長町なる町名が出てゐる。寛政二三年の作と言われる上田秋成の癡癡談にも長町貧民窟とある。

次に大江神社境内に見られる奉獻品にも長町と明記してある。例えば境内の手洗鉢に天明八年戊申歳六日長町七丁目とあり、本殿西横の高麗犬にも安政三年丙辰十二月長町とあり、西門の石の大鳥居には寛政五年癸丑五年長町六丁目とあり何れも長町という文字が刻まれている。

更に標石について見ると、昭和三年戒警察署内より発掘したものに「西すぐ左り、大坂長町日本ばし」と刻んである。その外明暦元年(一六五五)の水張にも長町の名が記され

ている。又三勝半七の墓碑の右横に「和州五條新町俗名あかね半七、大坂長町四丁目」とあり、中央に元禄八年(一六九五)乙亥十二月七日とある。

それ以前即ち天正十一年九月、豊臣秀吉が大坂城を築く頃の長町は、松原であり大坂城でもこの一部を城外の馬場として用いた時期もあつたと言われる。人里離れた松原に過ぎなかつたが、この地がたまたま南海道の入口に當つた為、次第に人の往来も繁しくなり此等の人々を相手の出店が現れ、それが掛小屋となり、やがて瓦ぶきの家に変り人が定住する人家となつていく。此様にして人口が増え、ついに一つの長細い町を形成するに至り、これが長町を造つた原因の一つであり、今一つはそこに旅籠屋の営業が許可された為、旅人宿が次第に増加した事にある。

旅籠・木賃宿

元來旅籠は「波太古・銅馬籠・籠・籠」と書き、ハタゴと発音し旅行に馬の食糧をもる籠であつたが、それが転じて旅行の食物や雑品を入れる籠になつた。此様に旅に携行する籠をハタゴと言つたが、この籠が多く集まる旅舎をもハタゴと呼ぶようになっていく。

初期のハタゴは皆農業と兼業していたやうである。更に文献によると応徳三年頃の作と言われる今昔物語に「宿ヲカリ、ハタゴヲ開イテ物ナド食ヒ」とある。当時は旅行に食

糧を入れて携参する旅具としてのハタゴ、つまり一種の物入としての役目を果している。

中世に入ると宿屋が出現し、この宿屋が少し発展しそこでは馬の飼料を用意する一方、その馬槽をもつて宿屋の看板とし、これを馬駄飼と言ひ、後転じて旅籠屋となつたと見るのが順当であろう。先の籠・旅籠は室町時代に入つてからは馬料入ではなく、旅行用品袋となり更に両掛・挟箱へと進歩する。この旅籠屋が旅人に食事を提供するのには正徳・享保の頃からであり、これより先明暦の頃、一膳飯屋の如きものが一部見られる。元龜初年頃までの旅行者は、一日の食料として糲を二合五勺、漬物等を携行し旅宿で温湯をもらひ、糲を時間をかけ軟化して食べたものである。

旅宿は単に宿屋を提供するのみで、夜具は出さなかつた。つまり旅人は単に木賃を払って泊めてもらつただけであり、慶長初年頃まではこの木賃形式の宿泊が一般的であるが、次第に旅籠形式へと移行する。

降つて江戸時代に入ると街道宿駅には本陣・脇本陣以外に、主として一般庶民や武士を宿泊させる旅籠屋が発達し、所謂木賃宿と急速に分化してゆく。寛文五年頃になると

「木賃ノコト、主人ハハ〇文、馬一〇文、下僕六文」となり、宿泊に身分差がうまれる。寛文十年四月、中国路岡山城下の宿屋中が岡山藩町奉行に當てた書上にも「木賃御定：」

とあり、木賃形式の宿は中國地方にも広まっていた事がわかる。延宝三年二月大坂町奉行が旅籠屋中にあてた『覚』の中には『宿賃ハ薪代共ニ、主人三三文、従僕 Hanson 半額』とある。つまり旅行者は米を携行する労苦を省き、旅舎に予め用意する米を購入して、自ら炊いたもので、その名の示すように木賃と米代とを合せて支払った制である。この木賃宿形式は慶応二・三年で結末をつける事なく、旅籠と相並んで明治・大正・昭和はもちろん現代にも生き続けている。そして貧困者、遊芸人等の定泊所となり、宿場の場末等に久しく残ってゆくのである。

石丸石見守定次

慶長・元和の戦で大坂城は落ち、その大坂に繁栄への希望を与えたのは松平上総守忠明と三代目東町奉行としての石丸石見守定次であろう。大坂歴代の町奉行の内、石丸定次ほど大坂に寄与した人物は他にいないが、その出処来歴は必ずしも明らかでない。

さて長町誕生の一原因とも言うべき旅籠屋に関しては、初代東町奉行であった久具因幡守正俊が、大坂の地に『旅人宿の制度』を認めた事が挙げられる。(長町は旅人宿営業許可地の筆頭)この制度が大坂に旅籠屋株を生じた起因であり、その場所は長町(南海道)・片町八軒屋(東海道)・曾根崎新地(西海道)の三箇所であり、許可理由は各々大坂

の人口(関所)であるからである。株の総数は二三で、当時長町には鬮屋・分銅屋・傳法屋・河内屋・大師屋・鍵屋・若江屋・坂井屋・玉の伏見屋・輪違屋等の旅籠屋が営業していた。

又元和五年(一六一九)に幕府は『口入宿主取締令』を発し、江戸に於ける桂庵(慶應)、大坂に於ける口入屋に制約をかけた。先に旅籠屋株を許してより四十余年後の寛文四年二月二十六日(一六六四)、三代目東町奉行に石丸定次が着任した。(仰付は寛文三年八月、着坂時五十九才)この時代、大坂は拡大繁栄を続け、その為全国各地より仕事を求めて来る力役者(米搦人・酒造人・油絞人等)が増加してゆくの、彼等力役者の為に長町へ木賃宿を許可している。この事は長町が街道の旅籠町として発展するのを助ける一方、商都大坂へ働き口を求めて集まる下級職人等の溜場として独特の形態を備えるようになってくる。此に加えて盗賊・悪党・非人・乞食の類も自然に集まり、やがて都市の貧民街・貧民窟と変化してゆく。

石丸定次が許可した長町の宿は、三十株であり、大坂全市内に集まる力役者宿泊の専有権を所有し、力役者達に木賃宿以外には宿泊を許させていない。しかしながら市域は拡張を続け、流入下層貧民も増加する中で、町奉行は市内に足溜屋(雇人受宿的)を設け、こ

れにも力役者を分散宿泊させた。この事は奉行所自ら規則を破った事になるわけで、その足溜屋から日々長町木賃宿仲間へ五〇〇文を支払うという形で事態を収拾している。その後長町は日々繁昌し、諸国から流入する西国巡礼・非人・乞食の類が増加し、天王寺村宇合邦周辺は彼等の野宿場となっていく。石丸定次は以上の如く、社会行政にも力を注いだ。その外商業行政・交通行政・警察行政・天災の処理等に抜群の手腕を発揮し、延宝七年五月十一日(一六七九)現職の町奉行として死亡、七七才であったと言われる。

極貧窟・極難波者

元禄四年の大坂人口三四五、五二四人中、浮浪人・非人が一、二六〇人に達し町奉行は彼等を集める為、四ヶ所(天王寺・飛田・千日・天満)の長吏に命じて非人小屋を建てさせ収容させている。同六年に大坂で紙屑を再生したとの記録があり、今日の屑拾いが存在していたと考えられる。江戸も中期以降は、鎖国による海外市場の遮断、あるいは商業の自由が、株仲間によるギルド的統制からの固定化、あるいは消費階級である武士団の窮乏、農村の荒廃から生産高の低下等、種々の原因から城下町の繁栄も徐々に頭打ちとなる。この変転の谷間を縫って貧民の群が連日流入して来る。彼等にとつて少くとも都市の存在は、封建制度の強い農村よりは自由なの

であろう。特に江戸・大坂には彼等の口糊すべき生業があったからである。例えば日傭座・桂庵・口入稼業を職業とする親方もあり、大都市なるが故に常時日傭人足の需要もあるわけである。技術の無い者でも各宿駅や港湾で、常時又は臨時の賃労働者（後の立ん坊・アンコ）となったり、湯屋の三助、米搗人となったり、多少資力のある者は行商人、小売人になる事も可能であった。

一方大坂も又江戸に劣らず天災が多く、大火だけでも幕末に二五回、洪水は二〇回に及び、その度毎に多数の被災者＝窮民を生み、その救済におわれている。天明の飢饉では窮民一八万人（全人口三九九、七七七人）を数え、天保の飢饉では大坂全人口の半分、二〇万人が窮民となっている。享保九年三月大坂は妙知焼で、全市の三分の一が焼失し、町奉行は緊急用の城米一萬石を窮民に貸し出してゐる。

当時幕府は急増する貧民・流入者・窮乏者の救済方策として、各藩に土木工事を奨めていた。大坂は『天下の財、ことごとく大坂に集まる』と言われる程の物産集積地であったので、その運搬便利の爲、又度重なる洪水対策も合せて水路開発が盛んに行われた。有名なものに道頓堀川・十三間堀川・高津入堀川・桜川・難波入堀川（難波新川）等がある。特に難波新川は享保十七年十一月難波御

蔵を築造した翌年五月に着工している。この開さく工事に、長町を中心とする大坂の下層貧民をして土砂を運搬させ、彼等に限って特別に、毎日その労銀を支払っている。これは立派な貧民救済事業であり、この事をもって難波新川のことを昭和二十七年頃まで、別名『極貧堀』と呼んでいた。安永三年には長町辺りより疫病が発生、市内に流行し下層貧民・下賤の者數万人が死亡している。天明三年の飢饉では、大坂の窮民二〇万は、その一部をすてついに米蔵を襲撃している。（人口三九九、七七七人、江戸一〇〇万人）町奉行所は米五〇石を三万人の『極難民者』に限り支給し、錢二五、〇〇〇貫を一八九、〇〇〇人に給付している。当時江戸では一面で米五斗三升、大坂では米二石が一兩二分であった。

天明・天保の飢饉時に於ける貧民達の食糧を挙げてみる。即ち松皮餅・きらず飯・つゆ草のおひたし・わら餅・泥がゆ・小麦柿団子・ほうずきのおひたし・入茶がゆ・松葉団子・桑の葉の一夜漬等であったと言われる。文政五年（一八二二）九月一〇月にかけて長町にコレラが発生し、死者二、八三一人を数え、患者は三日で死亡したので、長町では『三日コロリ』と呼ばれた。降って嘉永の頃より長町六丁目・九丁目あたりに無宿者、非人等の為の下等木賃宿が許可され、長町スラ

△化の端緒を作っている。文久二年（一八六二）再び、長町一帯にコレラが流行し、一応下火になった頃、長町六丁目・九丁目に限って木賃宿三〇株を特別に許可している。嘉永・文久と二回にわたり木賃宿を許可した結果、他国者達が一斉に長町木賃宿に集まり、しかも定住の傾向が強くなり、今日のドヤ（労働者の街）的性が一枚加わった事になる。（華頂短期大学社会福祉学科助教）



釜ヶ崎今昔考 (その三)

明治時代の釜ヶ崎



釋 智 徳

維新政府が發布した

唯一の救貧法である恤救規則（七年十二月八日太政官達一六二号）では、救貧責任の主体を『人民相互ノ情誼ニ因テ』行うべきと規定し、前近代的な隣保相扶や、親族相助に救貧の主体と責任を求めている。此は封建社会で行れた救済主体である地縁血縁という共同体的救済をそのまま継承した最も確かな例である。我国に西洋の近代的救貧思想が移入されるのもこの過程であり、特に維新前後からの自由放任主義的救貧思想の紹介によって、支配者層の中には『貧困・貧民は怠惰によるもの』とする観念が形成されてゆく。維新直後の東京だけでも約五〇万人の日雇貧民がい

一、千日前の刑場廃止

当時の難波・今宮辺りの情景は、南海難波駅以南は田畑が続き、今宮はえびすの松原と呼ばれ、西は木津を隔てて大阪湾が一望に見渡せる程、閑静な所であり今宮村は有名な蔬菜地帯で、畑場八ヶ村と呼ばれた。その南即ち恵美須町からは、住吉まで一望の草原と中に点々と畑地が見られ、東に至る逢坂も幅狭く急であり、更に茶臼山周辺は大阪の郊外で、今日釜ヶ崎の中心である霞町辺は、河鹿の鳴く声が聞かれたものである。さて大阪府は元年七月、府令を以て長町木賃宿真榎の宿屋取締の件として、無宿者の悪業を働く者等が長町木賃宿に巢食うのを防ぐ一方、長町貧民街の膨張を抑制している。三年二月府令を以て木賃宿ボン引、不正身元引受を禁止し、木賃宿泊は『長町四丁目に限る』としている。三月府調査によると、人口三三万人の内難波人五万六千人、この内約一万人は長町貧民街人口としている。此等都市下層貧民達はマッチ工場や紡績工場の労働者となり、その後続々流入する農村からの向都労働者と共に、大阪の都市下層貧民階級を形成してゆく、四月有名な千日前の墓地が廃止されるが、その頃の千日前は難波村に属し、一面の葱畑がありその中を流れる難波新川は、難波の御蔵に米を運ぶ為に付近の貧民・窮民を使役して掘られ

を禁止し、横濱、星地、阿部、野、田、等、
時は俗に南の新墓と呼ばれたものである。

二、コレラと貧民学校

七年十二月「恤救規制」が制定されたが、国民の評価は残念ながら無関心に近いものであった。積極的に論評したのは『東京日日新聞社』唯一紙という有様であった。その他郵便報知・朝野新聞・新聞雑誌・読売新聞等には一行も触れておらず、官報公布の欄に条文が掲載されたに過ぎなかった。この頃日傭労働者の内、最大のものは身体が強壯で賃銀も良いのが、荷車を運ぶ運送人足所謂「車力」である。更に大阪では此の車力の引く重い荷車を、先に廻って引っぱったり、坂で後押しをする日稼人足も生れた。この人足を関東では立ん坊・風太郎と呼び、大阪では先曳（今のアンコ）と言われた一群の労働者であり、坂の袂に屯して道行く荷車にやらしてんかと声をかけて仕事にありついていた。次に我国に於けるコレラ流行の当初は、普通文政五年と言われているが、八年の初め九州に発生したコレラは山陽・山陰道を経て畿内に侵入、九月下旬十月まで大阪一帯で猛威を振り、茶毘に付した者一、二二七名という。為に大阪の人達は『三日コロリ』と呼び恐れたものである。此のコレラ患者の処理には長町の貧民が働いている。しかしその長町こそがコレラの巣窟でもあったわけで、此等人夫（患者

及び死体の運搬）は、日当が長、食事も付、為、希望者が多く容易に順番がまわらないという有様であった。掃りは消毒粉で全身真白な姿になるが、長町貧民街の破れ障子の隙間からは羨望の眼が輝いていたという。長町でコレラが発生すると警察では路地を交通遮断し、患者を内部に閉じこめる。しかし完全閉鎖のほすが、人数が次第に増加して行くのである。つまり無料給食への魅力は、恐ろしいコレラの感染よりも大きいわけで、上手に潜入すればその日の食い扶持は心配なしというわけである。又この年、長町に『貧民学校』があった事が新聞記事に残っている。この学校では、後に触れる徳風・有隣小学校と同様、教育・学習よりも子供達の身仕度が先決であった。それだけ当時の貧民児童は、一見それとわかる程に不潔であったと思われる。記事の見出しに貧民学校としている事でも、当時の貧民社会、即ち長町が一般社会とは区別された別天地であった事が判明される。

三、大貧院の廃止とマッチ工場

十一年九月二十日、府は『天第四二号』を以て貧窮者に対し無料施薬券を与え、診療が受けられるように救済方法をこうじ、更に十日十一日『天第一五五号』を以て貧民治療について、施薬券使用は土地の便利によって居住区内で使用するように達し、遠くまで病人

を運ぶの事は、大貧院に依頼する。四年三月大阪は二度の大火に見舞われる。即ち三十四日の大火で二、九八九戸、三十五日の大火で三、〇〇〇戸余りが灰燼になつてゐる。十二月の朝野新聞には細民・窮民が困難のどん底にあつて、特に大阪長町貧民街では困窮のあまり、暴動を引き起す事も考えられると述べている。又同年に於ける大阪大貧院の収容者は約八二名で、内国費五五名、府費二七名であり、八二名中一〇名が病人、四七名が労働不能者であった。なお十二年十二月の大貧院予算は、一、四一九円であった。十四年二月十二日府は『甲第一八号』を以て、本年一月一日より府下大和・河内・和泉を除き他に備荒儲蓄規制を施行する旨を傳達している。大阪府は同年を以て大貧院及び分院の廃止を決定し、収容者達を小林授産場に引取らせている。小林授産場は受育社・博愛社・汎愛扶植会等と共に、私設社会事業としてその業の為貢献する所は大であった。十五年の長町貧民窟の実態を知るものとしては、政府派遣の横村巡察使の報告を挙げる事が出来る。即ち『勸業課ノ処分宜シキヲ得バ、或ハ良民トナルベキモノアラン。日本橋以南、長町モ亦窮民ノ集処ニシテ、高津新地ヨリ一層甚シク且ツ多シ。道路ニ棄タル廢物ヲ拾イ帰ヘルアリ、魚鳥ノ臟腑ヲ持帰ヘリ食ウアリ。此処ニテハ業ヲ為スモノヲ見ズ、食スルニ非ザレ

ハ必ズ屋敷ス。是レ則チ窃盜・拘捕・賊徒ノ巢窟タリ」と述べている。その他三間憲兵中佐、警察練習所ヘーン大尉らも長町を巡察し、その報告を提出している。当時長町の汽車長屋・カンテキ長屋等の女子や老婆の室内労働は、マツチの箱張りであり、子供は年少労働というよりは幼年労働者であり、その年令をいつわってマツチ工場に就業していた。この燐寸職工とか燐寸会社という言葉は、明治後半から貧民窟事情を描いた報告或は文学作品には必ず現われている。大正時代になるが、神戸新川貧民窟を描いた賀川豊彦の『死線を越えて』にも燐寸工場が出てくる。後述する徳風尋常小学校の児童も又マツチ工場で多く働いている。即ち日本の燐寸工業は、貧民窟の労働力の上で成長して行く。今日ではその片鱗すら見当らないが、当時のマツチ工場所在地を地図の上に再現すると、そこが即ち大阪の貧民窟でもあった。

四、封建的スラムの終焉

十八年十二月長町貧民街に於る土方手伝一家の生計費を見ると、夫一日一四銭で一ヵ月二十日稼動として三円。家賃月四〇銭だが日払(二銭)にする為に六〇銭、妻はマツチの箱張り内職で一日三〜四銭で二十五日稼動、老婆の糸繰り代とで一円となり、合計月四円の生活であった。さて大阪府に於ても貧民窟という都市の恥を拭い去ろうとする努力は種

々あったが、当時の事とて民生・労働行政が明確でなく、単に防犯・衛生・都市美という観点からであった。同年九月九日付の東京日日新聞によると、八日府庁に於て『大阪細民移住会議』が行われており、その内容については鈴木梅四郎の『貧民窟視察記第二十三』に詳しい。とにかく当局で住宅改良が問題になった事は事実であり、このスラム・クリアランスへの理由は、幾度も襲ってくる伝染病の為である。十二月府令第六三号で『宿屋取締規則』を制定している。即ち木賃宿は大阪四区で営業する事を禁止、又接続町村に於ては場所を限定するところがあるが、南区に属した長町木賃宿街は、日家賃を取る長屋形式をとって撥装し、そのまま営業を続けている。二十年三月頃の長町では、葬式代もなく死人が出ると連族に向つて葬式代の事を気の毒に思っていたという。長町では死人が出ると死体を漬物の古桶に詰めて夜中にそつと火葬場に置いてくるのを常としていた。所がコレラで死亡すると葬式の世話も、費用も全て役所が行うので、貧民街では『どうせ死ぬならコレラで』と言われたという。その頃の人力車夫は大体日収三〇銭で、この中より車の損料・草鞋代一〇銭が引かれ、取り分は一七〜二〇銭が相場であった。この長町貧民街の最盛期は二十年代であり、ピーク時には戸数四千、人口一万を数えた。彼等は身分的には家主に従

属し、更に小は七〜八軒、大は三〇軒という長屋を構成し、一戸の構造は二〜四畳半の一室であった。各戸に出入する為には必ず家主の家の一部を通る仕組になっていた。家主は毎夕方、門前に立って帰ってくる店子をつかまえ、日家賃一錢五厘〜二錢五厘を取る。この家主の家に付属する長屋群を称して『ウラ』と呼び、家主の名をつけて〇〇裏、〇〇浦とか呼んでいた。一体この期のスラムは、前近代から新しい社会体制の所産としての近代スラムに移行する過渡期として捉える方が正しい。なぜならば封建体制下での主なスラム存在要因である封建的貧困・身分的貧困・職業的貧困等の諸要因が、まだ完全に消滅していないし、さりとて完全な資本主義経済体制からの窮乏による所産というわけにはいかないのである。

五、長町から釜ヶ崎

二十八〜三十年にかけて天災・凶作が重なり、為に農村も都市も等しく窮乏化し、日本の貧困階層も肥大化する。横山源之助は窮乏層の中から所謂小作人・職工・人足・賃仕事・車夫・夜店人・芸人・職人等を『細民』、乞食・浮浪人・スラム住人・無職者等を『貧民』とし、此等を一括して下層社会と命名している。この頃の大阪は日本産業の中心地となり、それと共に人口は急激に増加してゆく。即ち下層貧民及び下層労働者群も増

加し、スラムも膨張する。つまり長町貧民街から釜ヶ崎・飛田へと言う表現をすれば、大阪南の貧民街に於る歴史の大局は把握出来る。徳風学校もこのラインに沿って南高岸町・広田町・釜ヶ崎へと移動する。しかしこの南高岸町・広田町も所謂長町ではなく、勿論元貧民窟でもなく、大阪市郊外の静かな場所であった。それが三十年の第一次大阪市々域拡張によって、南区に編入されるのである。しかし二十年頃より極めて僅かではあるが、長町貧民窟や木賃宿が浸透していた跡はある。それが三十年に入ると長町を出て大きく南の釜ヶ崎・飛田に及んで行く。市域拡張により今宮村北半分が大阪市に編入され、又同時に西濱町・難波村・木津村・天王寺村・生野村をも併せ、新市九町を加えた。ここに長町が今宮村へと第二長町を形成する時期に入るわけである。当時今宮町は戸数七百、人口二、三〇〇で、今宮村は戸数一三四、人口五〇〇人である。この年十月・十二月にかけて毎日新聞が『神戸の貧民部落』、報知新聞が『昨今の貧民窟』というのを連載している。

六、不潔住宅の強制撤去

三十一年八月、日本橋筋五丁目付近の路地では、家屋こそや新しいが前垂だけの素裸の若い女が、どす黒い唇を開いて大声でシャベリ、暑いのにボロボロの袷を身に巻きつけた男が、青い顔で横に立っている。こんな風

景が到る所に見られたものである。長町三、四・五丁目の戸数二、二五五、人口八、五三二名で、内訳は男子四、二二五名、女子四、三〇七名とある。三十四年十月大阪は二年後の第五回内閣勸業博覧会に備えて準備に入る。その最大の準備は、此を機会にその通路に当る日本橋筋、特に表通りの貧民住宅・不潔住宅の取り壊しであった。日本橋筋三丁目周辺の裏町にはカンテキ裏・蜂の巣裏等と称する不潔宿泊所が迷路のように入り組む密集地帯があった。彼等を関西線から南方に強制移動させ、その後に幅員五メートルの道路を一直線に通した。又博覧会の期間中は市内の浮浪者・乞食等を小林授産場に収容している。当時の長町に於ける共稼ぎのスタイルを見ると、夫は人力車夫、妻は刷毛繩緋内職・夫は提燈ヒゴ引き、妻は質仕事・夫は堂守、妻は菓子袋貼等である。更に夫婦で朝、昼、夜とその商売が変化するケースもあった。例えば早朝は蛤蛸売、昼間は座職、夜間は露天商。又は早朝は納豆売、昼間は甘酒屋、夜間はおでんの屋台を曳くというふうである。これだけ夫婦して働いても一日二〇〜三〇銭、少ない時は一〇銭にもならぬ日があったという。当時の記録としては三十六年五月号『雑誌文芸界』に松崎天民の『夜の大阪貧民窟』が、同年七月二十三日の大阪朝日新聞に『大阪の貧民』が、翌三十七年一月十日より三十一日迄

平民新聞が『東京の木賃宿』を連載している。

七、徳風・有隣学校

三十九年六月二十八日より約二ヵ月に亘って大阪難波警察署(現浪速署)は、長町貧民街一帯で大仕掛な『特別掃蕩取締』を実施した。西関谷町に臨時出張所を開設し、対象は河原町二丁目東関谷町・西関谷町・広田町・南、北高岸町・船出町・日本橋東一、二丁目・下寺町三、四丁目・日本橋筋四、五丁目・逢坂下之町等の各町を警戒区域として、巡查二〇名が午前八時〜午後六時まで区域内の戸別調査をしている。四十年に入ると釜ヶ崎・飛田は、名実共に第二の長町と呼ぶにふさわしいスラム街に成長する。この時点でやっとスラムが社会問題となり、為政者もこの現状を無視出来なくなってくる。この大阪での貧民対策に先ず立ち上ったのが『警察』であった。四十三年九月警視天野時三郎が難波署長に着任し、管内巡視の際、制服・帯剣姿の署長に向って七才の子供達が石を投げつけた。天野署長はサーベルを抜いたり、叱るより前に教育の問題だと深く考え、山下高等部長に相談している。山下部長と熟慮の末、管内の有力者『久保田権四郎』氏の援助を乞い、学校設立の快諾を得ている。毎月三十五円の経営費と貸工場の一部を提供され、翌四十四年七月五日に開校されるのが『徳風学校』である。天野署長は同時に管内に『有

隣学校』(六月十五日)も開校し、更に難波署内に貧民調査隊を編成し、貧民街の実態調査に当たっている。又天野署長の斡旋により『先曳』の組合が、米田清兵衛を中心に結成されたが、組合費の徴収が思うにまかせず、四十五年に解散している。四十四年七月、内務省地方局では都市社会事業の資料として東京・大阪に於て『第一回細民調査』を実施する。難波警察署は、管内に一大貧民街を有しているだけに、この調査には天野署長自ら陳頭指揮を行い全面協力している。当時の大阪府警察部長池上四郎は、貧民救済について非常に関心が強く、警察の衛生・保安課長を歴任した警視天野時三郎を、この難波署長に任じたのも池上なら、後大阪市長の時、再び天野を社会部長に抜擢したのも又池上四郎である。この調査によると大阪の貧民は一六、四九一人である。この他マスコミとしては四十四年六月八日、大阪朝日新聞が『貧民学校の設立』を、六月十六日、同新聞が『有隣小学校の開校』を、更に十八日、同新聞が『病める貧者』をのせている。

八、社会事業の黄金時代

こうして徳風・有隣の両校が開校したわけであるが、なぜ当時の警察署長を始め警察が教育に手を染めたかという疑問が残る。二校いずれも天野署長が発案し、管内富豪が資金を提供してあり、更に教育には警員はもたら

んその妻までが自発的に奉仕している。多分に警察の学校というイメージであり、又それを積極的に支持する特別の風が、当時の大阪府警察全体にあつた事も確かな事実である。これに関して法学博士小河滋次郎は『大阪の救済事業』という論文で、その特色を説明している。即ち『警察方面の熱心さであり、現在大阪に於る救済事業の一特色として警察官が救済事業に尽力する事である。市内に大阪府警察本部をはじめ、数個所の警察署があるが何れも救済事業を熱心に押し進めており、何か社会事業をやらねばという気運と言おうか、競争心といおうかが働いている事である』と書き出して具体例を幾つかあげている。即ち労働者の宿泊施設としての大阪自強館、曾根崎署の地区改善・昼間幼児保育場、九条警察署の盲人保護協会・盲人学校。浮浪者失業者に旅費を与えて帰国させる事業、南警察署の慈善夜学校、難波警察署の地区及び小額所得者の改善・徳風学校・有隣学校の運営としている。又当時は方面委員制度もなく、貧困者の家庭を訪ねるのは警察官のみであり、此等都市下層貧民に理解ある警官、署長クラスの背後にあってというよりも上位にあって各種救済事業の場面にしばしば名前が出るのが『池上四郎』である。四十四年十二月には池上警務長・大阪府知事・小河

博士、内務省警保局長の一行が、今日の金

崎一帯を視察している。この時案内したのが中村三徳保安課長であり、彼は後の大阪自強館の設立者となるわけである。後、池上は大正二年から同十二年まで、大阪市長の要職にあり、かつての部下天野時三郎を社会部長としていた。この名コンビで大阪市の民生事業が大躍進をとげるわけである。一方大阪府に於ても大久保知事・林知事と続き、これに小河博士が囑託として存分に腕をふるい、有名な『方面委員制度』を発足させるに至る。此様に府・市を中心に所謂大阪社会事業の黄金時代が築かれ、この事はとりもなおさず日本の社会事業のリーダーとも先駆ともなつてゆく。四十五年一月十六日、千日前で大火がありその跡地に楽天地が作られる。更に恵美須町近くには新世界が完成し、ネオン輝く通天閣も出来る。明治最後の大阪南には、このように『歓楽と貧困』とが隣り合ひ、編織様の如く通天閣を遠巻にするという地図が出来上ってくる。地上八〇〇尺の通天閣を遠巻にして北は日本橋筋東一丁目・東二丁目、東関谷町から広田東の周辺へかけ、東は下寺町、西は遠く木津北島町・西濱まで延び、南は市部の境界線である飛田のガードを越えて、今宮釜ヶ崎界隈に及んだ一帯がそれである。そしてこの通天閣からの遠望の内に東から愛染・徳風・有隣の三貧民学校があつたわけ

ある。又同朝日新聞が、この時